



クルニク城、Stanisław Nowaki 撮影、2005

## クルニク城

ポズナンの南 25 キロほどのところにある人口約 6,800 の小さな町クルニク Kórnik の中心部にある城は、堀に囲まれ、その水面に姿を映す壮麗な建造物で、観光の名所。1452 年に豪族ミコワイ・グルカ Mikołaj Górka がこの城を建て、その孫でポズナンの県知事のスタニスワフ・グルカが 16 世紀の後半にルネサンス様式に城を改造した。スタニスワフは、グルカ家の最後の男性だったため、彼の死後クルニク城は何度か所有者が変わり、1676 年にチャウインスキ家の所有に帰した。

18 世紀のクルニクの城主は、テオフィラ・チャウインスカ Teofila Działyńska (1714–1790) で、「白い貴婦人」の異名で民間によく知られている。

テオフィラは、クルニクの領主ズィグムント・チャウインスキを父としテレサ・タルウォを母として 1714 年 11 月 26 日にクルニクに生を享けた。7 歳の時、父を亡くし、11 歳の時、母にも死なれて、孤児となった。彼女の幼年時代と少女時代については情報が無く、その後、結婚までの 7 年間をどこでどのように過ごしたかは、まったく不明である。

1732 年にチェムピンの領主の息子ステファン・ショウドルスキ Stefan Szoldrski に嫁ぎ、夫婦でチェムピンに住み、三人の子をもうけたが、子どものうち 1736 年生まれの子フェリクスだけが生き延びて、のちにノヴィ・トミシル Nowy Tomyśl の町の創設者となる。

テオフィラの最初の夫は 1737 年に死亡。1743 年にテオフィラは再婚。二度目の夫のアレクサンドル・ポトゥリツキは、テオフィラよりも 8 歳若く、彼の所有地は妻のそれよりもずっと小さかった。その故か、この結婚においてはテオフィラが支配的立場にあり、結婚生活はうまく行かず、1754 年には離婚にいたった。以後、テオフィラは、独身生活を続け、クルニクとルノヴォ・クライェンスキの所有地と財産の管理運営の仕事に専念した。

# クルニク城の「白い貴婦人」

## 女傑テオフィラ

テオフィラはクルニク城を所有するチャウインスキ家の傑出した代表者だった。18 世紀後半のポーランド国家の全般的な凋落の時代にありながら、テオフィラは、クルニクと隣接のブニン Bnin の町を繁栄に導いた。

テオフィラがこの事業を達成できたのは、とりわけプロテスタントのドイツ人の入植者たちの集落を町にまで発展させたことと、ユダヤ人を支援したことによる。信仰を異にする異邦人を援助したことでテオフィラは中傷誹謗にさらされたが、彼女は動じなかった。ブニンの町にルター派のプロテスタント教会と町庁舎を建立し、またクルニクの教区教会(カトリック)の改築を行なった。

1740 年には所有地における賦役と現物での年貢を小作料に替えた。クルニク湖にダムと堤防を築き、道路を敷設し、風車、水車を建設した。この事業の達成によりクルニクはかなり大きな町に発展し、近くのシレムやシロダ・ヴィェルコポルスカを上回る町となり、1793 年のポーランドの第 2 次分割後はシレム郡の暫定的郡庁所在地とさえなった。

テオフィラは、文化問題にも強い関心をいっていた。ベルリンの王室図書館と交渉を持ち、《Journal encyclopedique 百科事典雑誌》を予約購読していた。建築様式や美術の新しい時代傾向に敏感で、クルニクの居城をバロック様式に改築し、庭園をフランス風に造園した。

## 「白い貴婦人」の肖像

テオフィラは、1790 年 11 月 26 日に世を去り、クルニクのカトリック教会の地下納骨堂に葬られた。享年 76。テオフィラのクルニクの町の発展に対する功績については議論の余地が無いにもかかわらず、テオフィラは、すでに生前からとかく口さがない世間の噂に囲まれていた。寡婦は複数の男たちと不倫関係にあり、とくにクルニクのカトリック教会の教区司祭やブニンのルター派教会の牧師との関係が取り沙汰された。

テオフィラの死後、現在クルニク城の食堂の壁を飾っているテオフィラの純白のロングドレスに身を

# 「婦人」の幽霊伝説

栗原 成郎

包んだ肖像画「白い貴婦人」が、19世紀にはいると、幽霊伝説の源泉となった。

夜の12時少し前になると、テオフィラは、肖像画から抜け出して、ひらひらする白いロングドレスの裾を手で押さえながら、玄関口に出て、庭園へ向かう。12時になると、黒馬に乗った騎士が駆けつけてきてテオフィラと落ち合う。騎士は、テオフィラを黒馬に同乗させて並木道を駆け、二人は闇の中に消える。一番鶏が鳴くと、いつのまにかテオフィラは肖像画の額の中に戻っている。

「白い貴婦人」の幽霊伝説の起こりは、テオフィラが夕方しばしば公園を散歩したことが契機となっているらしい。テオフィラは、厄介な偏頭痛に悩んでいた。その痛みを和らげるために、彼女は自分の趣味に合わせて造らせたフランス風の庭園の中で時を過ごすことを好んだ。



クルニク城の「白い貴婦人」  
テオフィラ・チャウインスカの肖像  
Antoine Pesne (1683-1757) 画、1754

テオフィラをランデブーに誘う黒馬の騎士の正体は不明であるが、この夜の騎馬遊行は、クルニクの湖畔にあった中世の古い館の廃墟の伝説と結びつけられている。現在のクルニク城の近くに、ひと昔前にクルニクの領主であったグルカ家の狩猟

用の館が廃墟として残っていた。グルカ家は、権勢をふるった豪族で、莫大な財宝を狩猟館に隠していた。スタニスワフ・グルカの死後、その財宝は悪霊たちが護っていた。狩猟館は時の経過とともに廃屋と化していったので、町の住民たちがその財宝を手に入れたと思うのも不思議ではなかった。しかし、財宝の守護者の悪霊が他人の侵入を許さなかった。

クルニクの古文書は、テオフィラが領地の管理運営の能力に長けた理財家であったことを伝えているが、ある日、大火が生じて町の大半が灰燼に帰した時、グルカ家の廃屋と化した狩猟館の解体をテオフィラが命じ、取り壊して残った煉瓦を罹災した町民に分配して、その後の火災に備えてその煉瓦で各戸に煙突を建てさせたことを領主の英断として記している。

伝説によれば、グルカ家の財宝の守護者であった悪霊が、狩猟館解体による昔のグルカ家の財宝の雲散を恨んでその行方が明らかにされる時まで、テオフィラに夜の公園をさまよいつづけさせることによって復讐しているのだという。

クルニク城にはチャウインスキ家によって収集された選りすぐった蔵書と美術品の膨大なコレクションがあり、現在それらはポーランドアカデミーの管理下にある。

2012年秋にクルニクを訪れた際、「白い貴婦人」の幽霊伝説については、購入した案内書『クルニク城』にも記述はなく、専属ガイドによる説明においても触れられることはなかった。

〈参考文献〉

Zamek w Kórniku – Przewodnik. Wydawnictwo ZET. Wrocław 2011.

Bogna Wernichowska, Maciej Kozłowski. Duchy Polskie. Wydawnictwo PTTK. „Kraj” Warszawa, 1983.

\* くりはら・しげお 1934年2月21日東京都目黒区生まれ。

北海道との縁は、船舶会社勤務の父親の転勤により1949-52年小樽潮陵高校で学んだのが最初。その後、二度目の縁で北海道大学文学部に勤務(1992-97)。その時代が楽しかったので、三度目、2007年より札幌に移り住む。

ポーランドとの縁は日本との学术交流によりワルシャワ大学に勤務(1976-77)したことによる。

東京大学名誉教授。

